

授業研究の課題と方法：  
戦後授業研究の歴史的検討をふまえて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺岡, 英男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/5443">http://hdl.handle.net/10098/5443</a>

## 授業研究の課題と方法

### －戦後授業研究の歴史的検討をふまえて－

寺岡 英男

はじめに

2007年度アクションリサーチ研究会で「これからの授業研究と教職の専門性開発」、日本

教育方法学会 2008年度課題研究で「授業力の育成と教職大学院の課題」、というテーマで授業研究と教師の専門性開発に関わる2つの報告をする機会を得た。また、日本教育方法学会紀要第34号（2009年3月発行予定）で、秋田喜代美、キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習－レッスンスタディへのいざない』（2007）<sup>1</sup>の図書紹介を行う機会を得、この本からも刺激を受けた。

本稿では、はじめの2つの報告を元に、授業研究の戦後の歴史を辿りながら、そこに見られる基本的な筋道を明らかにし、それと『授業の研究 教師の学習』の問題提起とも関わらせながら、授業研究の再構築のための課題と方法をノータン的に検討してみたい。それは結果的に、教職大学院という新たな枠組みにおける学校との授業研究、教師教育改革の課題と任務を確認することにつながるように思われる。

まずはじめに、授業研究とは何かについて押さえておきたい。ジーン・ウルフと秋田喜代美は、『授業の研究 教師の学習』の中で、レッスンスタディの特徴をアクションリサーチと対比しながら述べている。ここでは、レッスンスタディを授業研究と読み替えながら、その特徴の指摘に拠ることとしたい。二人は特徴を次のように言う、

「授業実践の記録方法や授業検討会のディスコースの語り口や言葉、インスクリプションとしての実践記録、授業研究会で教員同士の語りから生まれた考え方や見方が、学校の教師たちの生み出したアーティファクト（人工物）として形成されてくる文化的な活動システムである」<sup>2</sup>

また、『授業の研究 教師の学習』ではいくつかの刺激的な問題提起がなされているが、特に第1章のなかでキャサリン・ルイスが、レッススタディの克服されるべき研究課題としてあげる4点を本稿では念頭に置いてみたい。4点とは、①主流となっている高い質を備えた研究のイメージとは違う研究の業績をどう築いていくか、②授業を共有し合い学校の文化的変化を生み出す契機、③日本ではカリキュラムを共有し教材を見せ合うことに依拠、④学んでいることの記録のあり方、である。<sup>3</sup>これらは授業研究の課題と方法を明らかにし、再構築を考えるときには重要な指摘であると思われる。

## 1. 授業研究の成立（～70年代）

授業研究とは何かについての押さえで、授業研究が、「文化的な活動システム」であるとの言及があった。授業研究がもつそうした性格は、それが故に定型化・形式主義化の傾向が絶えず付いてまわるという大きな問題を内にはらむことになる。授業研究の歴史は、そうした定型化・形式主義化とそれの革新を図る動きの歴史的であると言っても過言ではない。

『授業の研究 教師の学習』では、そうした授業研究の歴史的スケッチを佐藤学が試みている。<sup>4</sup>そこで佐藤学は、「1890年代にヘルバルト式の段階式教授の授業定型の普及」と定着に触れ、この伝統が今でも、授業を構成する枠組みや授業研究の方式、さらには授業研究を形式主義化する教師の意識において根強く継承されていると述べる。そして、その定型化を革新する授業研究が、最初には大正期の新教育運動で成立し、そこでの授業実践が「物語」の様式で記録され語られたことに注目している。この定型化の革新の動きは戦後の民主主義教育で甦った。

その後1960年前後の、オコンの『教授過程』など外国からの教授理論と研究方法の導入やテープレコーダの利用は、それ以前の「印象批評や権威主義的評定」を克服して、「実証的な」授業研究をめざす大きな契機となり、五大学共同研究と全授研の結成につながった。それ以降授業研究では、「授業における一般原理」を目指しながらも、研究対象と方法を異にする立場からのアプローチへと分化していった。それらは、例えば、教科内容・教材の再構成によって、科学的概念の形成過程を授業過程に具体化する方法での「教授学」建設、齊藤喜博等の優れた授業実践をモデル化し、教授学の一般化を図ろうとする立場、教授＝学習過程を支配する変数を取り出し、その変数間の関係から授業の最適化を図ろうとする行動科学化からのアプローチなどであった。<sup>5</sup>

## 2. 定型化された伝達型授業の見直しと模索（80年代～）

この時期の授業研究では、それまで支配的であった伝達型授業への見直しと、学ぶこ

と・子どもの思考過程へ、その系としての教師の教授行為への視点の転換が行われる。その背景としては、当時の学校が直面するいじめ、登校拒否、校内暴力、青少年非行など子どもをめぐる深刻な問題状況が、それまでの学校の仕組み・組織基盤そのものの組み換えを求めたことがあると思われる。当時の学習者レベルから授業をとらえ、そこから授業の改造をめざそうという流れとしては、1つは、稲垣忠彦に代表される、明治以来の授業の定型化を引き継ぎながら入学試験がいっそうそれを浸透させていることへの批判がある。また学習理論の領域では、行動主義心理学から認知心理学（情報处理的アプローチ）への転換がなされ、授業における子どもの思考過程、問題解決過程に改めて関心が注がれた。さらには、戦後成立した民間の教育研究運動においても、「わかる授業」から「たのしい授業」への転換に象徴されるような「教材観の転換」が大きな課題となった。<sup>6</sup>

この時期の授業研究の動きを示す出版として岩波講座『教育の方法』1987がある。<sup>7</sup>その第1巻『学ぶこと教えること』のはしがきをみると、当時の問題状況がわかる。

「今や我が国の、学校を中心とした教育システムは急速に老化しつつある。かなりの部分において形骸化、空洞化しつつある。…近代学校のメリットはほぼ出つくし、知識や学習の学校化と、社会的な振り分けにおける学歴主義とが、国民の活力や成長力をそぐ方向に作用しはじめている。それに対する効果的かつ実際的な対策は、容易に出て来ない。おそらくそのためには、政策や制度や方法をいじるのに先立って、すべての人々が、互いに学び合い教え合いして次の世代を育てることを、自分の直接の責任と受け止めなおし、人が学ぶとは、教えるとはどういうことなのかを、制度としての学校の在り方にひきずられないで考えていかなければならないのではないだろうか。」

### 3. 新たな方向性、枠組みの定位と具体的研究方法の模索（90年代）

80年代が、伝達型授業という授業や学習の見方・枠組みの囚われからの模索であるとするならば、この時期は、そうした囚われを乗り越える新たな学習観が示されることによって、授業研究の新たな方向性、枠組みの定位がなされたと言える。その学習観とは、80年代における認知心理学の情報处理的なアプローチの限界を超えて、主に新ヴィゴツキー学派によって提起されたもので、「知の営み」について、「個人の頭の中の表象の操作」としてしか考えてこなかった境位から脱して、学習を社会的・文化的実践への参加として捉える視点を示すものであった。石黒広昭は、この社会文化的アプローチの実践的意義について、以下のように端的に述べている。

「1つは、学習の過程や成果を個人に内在する能力の問題とするような宿命論的な立場から解放すること…もう1つは学習の持続可能性である。・実践が時間的にも空間的にも拡張していくことによって、その実践の内実はどんどん変わっていく」<sup>8</sup>

この学習観の転換は、それまでの定型化された伝達型授業のたんなる批判を超え、学習をそれが生起する社会的活動状況との関わりに焦点を当てることによって、学習や学習の場としての学校という枠組みを根本から問い直す課題を提起しているという意味で、極めて大きな意義がある。

しかし、それにも関わらず、そうした課題に迫る枠組みや研究方法については、依然として模索が続いていた。例えば、岩波講座『シリーズ 授業』1991-の刊行がある。<sup>9</sup>これは新しい授業研究の模索の1つの方法として、授業の事例研究の試みを行うもので、それを通して、実践的討論の形成のための教師と諸分野の専門家の協同の足がかりをつくることを目的とする企画であった。しかし、企画者の一人稲垣忠彦は、『シリーズ 授業』を終えるにあたり、別巻の中で卒直で真摯な総括を行っている。

「『シリーズ 授業』は、私の教育研究の歩みにおいて、先にものべたように夢の実現であった。そして、それは同時に、私の非力や、教育研究のむずかしさ、その奥ゆきを思い知らされる場であった。いっしょに共通の実践報告をきき、共通の映像をみる。そこから問題をひき出し、理論的に意味づけ、説明する。共通の具体的な対象を介するだけに、洞察力のちがひ、研究の蓄積と力量の差があらわになるのである。」

10

新たな学習や学校の枠組みをつくりかえていくために、研究方法としては、『シリーズ 授業』の採る、授業の事例研究を基本とすることは恐らくは正しい選択であると思われる。しかし、その事例研究をどのような枠組みへの組み換えの中で行うかについては、旧来のままに止まったものであった。それがこのシリーズの不十分さをもたらすとともに、逆に新たな条件が用意された場合での、事例研究の可能性を示唆するという大事な意味をもつ試みとなった。

稲垣は、不十分さについて、「授業の全体についての報告はあるものの、映像としては限られた一時間の場面での検討であり、また、多くの場合、授業者にとって、初対面のメンバーの多い研究会であった」と述べている。そして、それを踏まえて、事例研究の可能性として、1時限という限定された場面ではなく、継続的な研究、教科を軸とする研究等が重要であること、事例研究の目的は、教師の専門家としての成長、プロフェッショナル・ディベロプメントにあること、学校が教師のプロフェッショナル・ディベロプメントを目的とする事例研究の場となること、を指摘している。<sup>11</sup>

#### 4. 授業研究の再構築の課題（これから）

以上戦後の授業研究の経緯を見てきた。そこで浮かび上がってくる筋道とそれが示す課題については、少なくとも以下のようなものが確認できるように思われる。それを「はじめに」で紹介した、キャサリン・ルイスが、レッスンスタディの克服されるべき研究課題

とした内容とも関わらせながら述べてみたい。

第1は、学習観の転換に関わる課題である。学習とは、知識を内化する過程ではなく、社会的共同体への関係づけ—社会への十全的参加者になることを意味している。<sup>12</sup>ここでは、新たなリテラシー形成をめざす授業やカリキュラムづくりが課題となる。授業研究についても、1時間の授業を対象とするのではなく、学習するコミュニティのなかでの継続的な学習活動の展開が対象となる。ここでは、教師の指導のあり方というよりも、授業の中での子どもの実際の学びを事実とそくして相互に共有し合い、その中から子どもの学びの展開を跡付け吟味することが求められる。また事例研究の方法としても、限定された映像ではなく、あるまとまった学習活動の展開やその筋道を描き出せるという意味で、「物語」の様式で語られる実践記録が意味をもつことになる。<sup>13</sup>

第2は、教師の専門的な力量形成についても、旧来の学習や授業の枠組みの中で求められるものとしてではなく、新しい学習を支え、授業やカリキュラムづくり、さらには学習するコミュニティづくりを行う、新たな専門的な力量形成が求められることになる。授業研究は、上記のような教師の力量形成、稲垣の言葉を借りれば、プロフェッショナル・ディベロプメントの事例研究を主な対象とすることになる。かつての授業研究が、「授業における一般原理」を目指したのに対して、これからは、具体的な実践にそくした事例研究を通しての授業研究の方法が求められる。その研究は、ルイスの言う「主流の高い質を備えた研究のイメージとは違う」研究を、「省察的实践」をふまえた高い質を備えた実践研究として新たに作り出していく作業につながる。

第3は、大学ではなく、稲垣が指摘するように、学校が教師のプロフェッショナル・ディベロプメントを目的とする事例研究の場にならなければならない。学校を中心に学習・授業の改革や教師教育改革を行うことになる。ルイスのいう同僚教師との共有も含めた教師の協働の実践研究の組織化とそれを通じた学校という学習のコミュニティづくりの課題もここに位置づくことになる。ここでは、大学と学校、理論と実践との関係のこれまでの関係の枠組みの見直しが迫られる。そして、新たな枠組みとして設計された教職大学院の役割もここに基礎をおかなければならない。<sup>14</sup>

<注>

<sup>1</sup> 秋田喜代美、キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習—レッスンスタディへのいざない』明石書店(2007)。なおこの本は、現在海外に紹介・展開され、「レッスンスタディ」と呼ばれるに至っている授業研究について、「伝統的な授業研究を『レッスンスタディ』と捉え」、「日本の内側での学校改革として議論されてきた授業研究を、再度自覚的に捉えなおす」ことを目的としている(秋田喜代美)。

<sup>2</sup> 同上書 pp.27-29

<sup>3</sup> 同上書 pp.21-22

<sup>4</sup> 同上書 pp.44-45

- 
- <sup>5</sup> 『現代教育学事典』労働旬報社、1988の「授業研究」の項（杉山明男・鈴木秀一）など参照。なお、このように分化したアプローチによる授業研究について、佐藤学は、1992年の「『パンドラの箱』を開く＝『授業研究批判』」において、「共通するのは、典型的な授業に込められた技術原理を一般化する理論研究」であり、それは、「授業の科学化」とそれに対する1つの神話としての「授業研究」であるという批判を行った。（佐藤学『『パンドラの箱』を開く＝『授業研究批判』』『教育学年報1 教育研究の現在』世織書房1992）
- <sup>6</sup> 寺岡英男「1970年代における民間教育研究団体の『教材観の転換』をめぐって」『福井大学教育学部紀要』第39号、1989 では、これらの潮流を、民間教育団体の教科研究を中心に考察を試みた。
- <sup>7</sup> 岩波講座『教育の方法』全10巻別巻1、岩波書店1987から
- <sup>8</sup> 石黒広昭『社会文化的アプローチの実際』北大路書房2004、p.23
- <sup>9</sup> 稲垣忠彦他編・岩波講座『シリーズ 授業－実践の批評と創造－』全10巻別巻1、岩波書店、1991から
- <sup>10</sup> 稲垣忠彦「授業の事例研究と教育研究」『シリーズ 授業』別巻『授業の世界』所収、岩波書店、1993 なお、これは稲垣忠彦『授業研究の歩み－1960年－1995年』評論社、1995年に収められている。
- <sup>11</sup> 同上「授業の事例研究と教育研究」
- <sup>12</sup> レイブ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』産業図書、1993
- <sup>13</sup> 福井大学教職開発専攻「学び合うコミュニティとしての学校をつくるために－学校改革実践研究入門－」改訂版2009.1
- <sup>14</sup> 福井大学教職開発専攻の設置構想とそれに基づく取組みの実際は、本書等を参照されたい。なお、秋田喜代美、キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』では、専攻の専任教員である松木健一が第11章「学校を変えるロングスパンの授業研究の創造」を執筆し、その中で福井の教職開発専攻の授業について紹介している。